

光 学 天 文 連 絡 会

GROUP OF OPTICAL AND INFRARED ASTRONOMERS (GOPIRA)

会 報

No.35

1985-4-25

光学天文連絡会事務局（東京大学理学部天文学教室）発行

運営委員選挙結果

日時：1985年3月18日 10:40-13:00
 場所：宇部科有
 出席者：
 議決：(水)

有権者数：211名(1985年2月15日現在)
 投票者数：94名(1985年3月20日締切)
 無効票数：10票
 有効票数：930票
 内白票数：30票
 各得票数：

1.	小平	桂一	68票
2.	磯部	瑛三	59票
3.	田中	清	49票
4.	田村	真一	47票
5.	小暮	智一	47票
6.	岡村	定矩	45票
7.	西村	史朗	44票
8.	兼古	昇	39票
9.	舞原	俊憲	38票
10.	若松	謙一	36票
11.	家	正則	35票
12.	安藤	裕康	31票
13.	清水	実	30票
14.	平田	龍幸	26票
15.	山下	泰正	26票
16.	佐藤	修二	23票(次点)
17.	石田	慧一	20票(次点)

** 光天連日程表 **

1985年5月11日(土)	13:00より	運営委員会	(東大天文学教室)
1985年5月22日(水)	学会終了後	総会	(学会A会場(仙台))
	ひきつづき	運営委員会	

体制WG 会合メモ

日時：1985年2月13日 10:45-13:15

場所：東京大学理学部天文学教室会議室

出席者：家、石田、大谷、小倉、小平、斉藤(衛)、西村、前原、山下、若松、(清水)。

議題 1) JNLITの体制について

2) ユーザーズ・コミティーの設置について

討議経過 ●小平から東京天文台側での進展状況について報告があった。また、次のコメントがあった。①JNLITは「共同利用」が望ましく、その具体的体制については、諸調査の進展にともなって深めて行く。②現在、水沢等の地研究機関の体制が流動的なのでJNLITの体制も天文分野の全体的再編成という中でしか考えられない状況である。③学術審議会の答申「学術研究体制の改善のための基本的施策について」(学術月報1984年2月号)では、一般に、国立研をすすめているが、東大側は「巨大」だからといって拒否しなくなる雰囲気である。●斉藤から、国立大学共同利用機関(高エネ研、宇宙研、極地研、岡崎共同機構)の概要について報告があった。以下の質疑を行った。①客員とは？(教官当り積算校費、旅費、任期、教授会構成員？)②共同機関と直轄研の違いは？(教授法の適用を受けるか？)③共同利用の目的は1)巨大装置の建設・運営・利用のため(例：高エネ研)2)共同研究のため(例：基研)④岡崎は事務部門を簡素化するために研究所が1つにまとまっている。⑤国立大共同利用機関は、広く国・公・私立大学等の教員等を共同利用の対象とし(学術月報、昭52)●大谷からJNLITの体制試案(59年11月天文シンポジウム集録)について説明があった。以下の質疑を行った。①研究系を恒星、銀河、……と天体毎に分けるのか、観測機械ごととするのか？②研究系は研究者だけで良いのか？●若松から討議項目について以下の整理を行った。A)必要とする機能 1)海外設置に関連する事項、2)共同利用に関連する事項、3)国際協力に関連する事項、4)研究・機器開発に関連する事項、5)光・赤外の天文学特有の事項、6)人事交流。B)共同利用体制 1)既設の研究機関から学ぶこと(岡山・木曾・野辺山・宇宙研等)2)外国の天文台の体制から学ぶこと、について、まず、整理する事。C)ユーザーとホストとの関係。D)その他 1)天文学研究者の層を厚くする事、2)野辺山と同一機関となるか、「岡崎方式か」、3)建設段階と運用段階との体制。

なおユーザーズ・コミティーの設置については、5月の本任期終了までに結論を出す事を確認した。(文責 若松)

(室澤半文天大東) 全員参加 00:01 (土) 日11月8年881
(谷山) 研究会全半 全額 対下研究会 (水) 日22月8年881
全員参加 参加者

体制WG 会合メモ

日時：1985年3月1日 10:40-13:00

場所：宇宙科学研究所45号館1階会議室

出席者：家、小倉、小平、斉藤、関、西村、山下、石田、(清水)。

議題 1. JNLITの体制について
1.1. 経過報告(小平)
1.1.1. 東京天文台では、調査費(61,62年度)の概算要求を出すことをめざして東大当局に検討を依頼(2月16日)。
1.1.2. 技術検討会、7月27日、8月3日14日。
1.1.3. 光学検討会の定足と準備中。
1.1.4. ドーム内熱制御構造の検討のため、三層65cmドーム(1月)、岡山188cmドーム(2月初旬)、木曾シュミットドーム(3月上旬)、堂平91cmドーム等を、サーミスタ30点で測定。
1.1.5. 地形模型(2000分)をつくり風洞実験を33(60年度中)
1.1.6. サイト・テストを、マストに超音波装置をつけて、風向、風速、温度、湿度などを測定((2人2週間)+1人3ヵ月)×4回、61年度中)
1.1.7. 東京天文台将来計画書では、A. 大学附置共同利用研、B. 国立大学共同利用研、B1. 大型装置のみを吸収、B2. 東京天文台のかかりが移行多。場合についてもその影響について思考実験を始めている。
1.2. 共同利用体制について報告(斉藤：別紙資料、大谷：別紙資料)。
1.3. ユーザーとホストとの関係について報告(小倉：別紙資料)。
次回に検討される項目として、外国の天文台における共同利用、ホストとユーザーとの関係について、日本における光学赤外天文の現状と将来、機器開発、人事交流、建設と運営などが残った。

2. ユーザーズ・コミティーの設置について
最後の5分間になってしまったので、次回(4月)には、2.1. プログラム相談会(2月6日)について、2.2. ユーザーズ・ミーティングの次回について、2.3. コミティーをつくらんとすれば、どのような機能が期待されるか、などについて討議をして、設置について結論を出すことにした。

(文責 石田)

第33回運営委員会議事録

日時： 1985年3月23日(土) 13:00-17:00
場所： 東京大学理学部天文学教室会議室
出席者： 委員：安藤、磯部、岡村、兼古、小暮、寿岳、関(田村代理)、田中、西村、
山下 (欠席：小平、清水、舞原、前原、若松)
委員外：石田、尾中、中桐

1. 運営委員選挙結果

事務局長(田中)より、3月1日公示、3月20日締切(必着)、3月23日午前中に開票をおこない、別表(p.1 参照)の様な結果になったとの報告があった。

2. 事務体制について

会計(尾中)より収支報告があった。会費値上げの効果があって、最終的に黒字となり来年度への繰越ができそうである。一方、会費滞納者や連絡がとれない会員も出ているのでどうしたらよいかを委員会で検討してほしいとの要請があった。検討の結果、もう一度連絡をとってどうしても連絡がとれない場合、2年以上滞納しているものについては3年目に運営委員会で検討し、除名するかどうかきめることになった。また事務局長よりシンポジウム等の旅費・集録は赤羽賢司氏総研B、斎藤 衛氏総研A、北村正利氏総研Aより援助をうけほぼ満足すべき支払ができたとの報告があった。

次期事務局について、事務局長より候補とされた岡山、三鷹をあたって結果否定的であったとの報告があり、これに対して小暮より京都大学では運営委員選挙の結果を見てから物理学教室も含めて結論を出すことになっているが引き受ける方向で努力したいとの報告があった。

3. 各WG報告

◎東京天文台望遠鏡WG(西村)：

昭和61年度調査費概算要求は2月教授会で重要項目として大学本部へ出すことが認められた。将来計画委員会では任期満了の報告に天文台の大型装置計画として明記することになっている。望遠鏡WGは今週で73回を数えるが、会報に内容リストを載せる予定である。技術検討会は3月までに8回行われ機械系、制御系の問題点はほぼ洗い出されたと思っている。光学技術検討会は4月12日に第1回が行われる予定である。UKIRTとのリモート・オペレーション実験を行う予定で、4月にGatley氏と打ち合わせる。

◎国際協力WG(寿岳)：

IAUリージョナル・ミーティングで小暮、小平、古在の各氏が Hall 氏と議論した。11月、MKOユーザーズ・ミーティングに小平氏が出席した。サイト・テストの調査が山崎、寿岳、尾中の各氏によって行われた。10年間の海外学術調査の実態調査をした。59年度海外学術調査によって5つのパーティが観測協力に出かけた。60年度エジプトはだめになった。61年度はどうするか。石田氏がハワイを出すという話がある。チリも観測がふえているので重要だ。一つにしぼるか沢山出すか。

4. 次年度活動方針について

今回の運営委員会(5月11日(土))で議論するがその準備をしておく必要がある。仙台学会の初日(5月22日(水))後に総会をひらいて報告をする。報告書の作成者を次のようにきめた。会務報告と会計報告→事務局、活動報告→運営委員長、WG報告→各WG世話人、活動方針→小平。

活動方針について次のような議論があった。

小暮：望遠鏡についてはある程度天文台にまかせざるをえない。

田中：鏡材の選定は光天連も関心をもつべき問題である。サイト・テストにはマン・パワーが必要であり、現に風洞テストや温度測定は天文台外へ協力を求めている。実際の作業を光天連でサポートできる。

寿岳：主鏡をどのようなタイム・スケジュールできめるか。

田中：サポートについての計算の結果はほぼまとまってきた。メニスカスは力による168点のサポートで満足すべき精度がえられることがわかった。ハニカムは垂直にたてた時サポートをふやしてもとれない歪が残る(水平では80点で十分)。ハニカムの温度コントロールも技術検討会で検討され、従来考えられていた(1時間に鏡と同じ質量)よりも1桁近く大量の空気があるという話がでた。メニスカスはサポート点が多いのも問題だが、鋳込みに4年かかるという困難がある。

磯部：(質問に答えて)アリゾナ大の3.5mハニカムは今年中にできる。

山下：鏡材は63年本予算を出す時にはきまっていなくてむずかしい。したがって61年度内にきめる必要がある。

磯部：小原光学の90cmハニカム鏡は60年中に温度テストなどをする。(技術検討会の議論と)アリゾナ大学での温度コントロール実験とどうしてそんなに食い違うのか納得がいかない。(この問題は天文台WGで小平氏の考察があり、実験は鏡と空気の間大きな温度差をつけて行われており自然対流に近いが、温度差が小さいと空気との熱交換率が悪化することがわかった。)

寿岳：当初の目標が達成できないとき天文学はどうなるのか。

小暮：技術的検討結果の天文学への影響はシンポジウムで議論する。技術的検討が60年11-12月にまにあうか。

磯部：将来性を考えると、ハニカムが有利であることははっきりしている。

西村：光学系では補正系の問題がある。主鏡のF2を暗くするとどうなるか。

中桐：F2をF2.5にするよりも視野30'を24'にする方がずっと楽になる。

寿岳：30'が24'になる程度では天文学に大きな影響はないのではないか。

磯部：F2の方が将来性がある。

田中：観測装置について、数や立ち上げをどう分担するか議論する必要がある。

次に体制問題に入り、寿岳より天文台将来計画委員会の報告があった。全国共同利用は当然のこととして受け入れられているが、i)天文台付置(野辺山方式)、ii)天文台全体が共同利用研、iii)天文台をはなれた国立の共同利用研の可能性と問題点を列挙する。大学を出る場合(宇宙研方式)一部を残すか全体で出るか、これは教育の問題にかかわってくる。測地学(緯度観測所)との関係などすべての場合について検討する必要がある。光天連は強い意見をいえる立場にある。

小暮：光学・赤外の範囲でもっとも望ましい形態について意見をはっきりさせ、次に位置

天文学など他の分野との関連を考慮する。調整は研連に依頼する。

西村：宇電懇の野辺山に対する要望はどうなっているのか。11月8日）会員運営部の回答
寿岳：今は宇電懇はイニシアチブをとっていない。議論すべきであるとは考えている。

小暮：位置懇はどうなっているのか。宇電懇、光天連、位置懇でそれぞれ議論をすべきであろう。そのような呼びかけをするか。これを研連で整理する。光天連としては問題点を勉強し整理しておくことが必要。体制WGで問題点の整理だけはやってほしい。

山下：経緯度研究会というのがあるときいている。

磯部：位置天文学における新技術研究会が（文部省外も含めて）3年間続けられている。

関：体制WGは4月にひらく。既設および外国の機関の体制から学びたい。JNL Tの機能、野辺山との関係等問題の整理は一応した。

シンポジウムの時期は次回運営委員会でつめるが、IAUのあとだと12月末か1月になる。一方プログラム募集の関係で岡山ユーザーズ・ミーティングをもうすこし早くして10月後半としたいということもあり、10月末も考えられる。

5. 当面の活動について

◎研究連絡委員会：一先、研連委の活動について。

小暮：研連委は3月28日にある（次は9月になる予定）。小平氏が技術的検討について経過報告をする。今回はIAUと体制問題が主となる。電波、太陽、位置に対する提案をいそぐか、問題提起だけにするか。

寿岳：できることはあまりない。さしあたり宇電懇へ働きかけてみたらどうか。話し合いを持ちたいということで合同の会合があってもよい。特に準備はいらぬ。

小暮：体制については秋までに問題点をまとめる。上からの感じは急いでいるのか。

山下：急いでいるかどうかかわからない。天文台長は早いと思っているが。

◎PR文書：田中：会報特別号は会員にのみくばった。残りが80部ほどある。

小暮：研連に24部ほど必要。一般向PR文書は磯部氏が中心になって作ることになっていたが。

磯部：特別号は形がどうであれPR文書になっている。とすれば作る必要はない。

小暮：一般に配れるようなものが必要ではないか。

田中：事務局としてはあくまでも会報という形で出した。残部のとりあつかいについてここできめてほしい。

磯部：前回はばらまくという話はなかった。

小暮：東京天文台としてもPR文書が必要であろう。光天連と相互協力して作る。

寿岳：光天連と天文台とどちらが主体か。

小暮：天文台は概算要求などに使い、光天連は他の分野へのPR等に使う。いつごろまで全に出したらよいのか。

田中：特別号の準備は10月にはじめ、実際の記事作りは11月末より行なっている。発行は3月であるから、半年近くかかっている。今期の事務局の仕事にはならない。

寿岳：要求があったとき特別号は一般の人に出すのか。

磯部：方針を変更するならするで決定してほしい。特別号は明かにパンフレットである。

小暮：研連の文書として出すように申し入れたが、光天連で出すようにいわれた。

磯部：前回の約束と事情が変わった。これからどうするのか議論してほしい。

小暮：会報の特別号とするかどうかきまっていなかった。

田中：会員へ特別号の形で配布することは前回運営委員会で決めた。

小暮：残部のとりあつかいをどうするのか、新たに文書を作るのか。

田中：天文台内では表紙など少し変えたものがくばられている。

磯部：表紙等を変えるだけでは、実質的に同じものを出していることになるではないか。

この文書に将来のことが落ちていたのを問題にしているのだ。これで進路がきまることの方が問題ではないか。

小暮：特別号をPR文書として使うことを認め、その上でどういう使い方をするのか議論する。i)そのまま使う（光天連の名を残す）、ii)多少変更して中身のみ使う（光天連を削る）、iii)別の文書を作る。

岡村：運営委員会としての決定をはっきりしてほしい。デリケートなことなのであいまいな形で進むのはよくない。定足数などははっきりさせるべきだ。

小暮：会則を改正することも必要か。

中桐：そこまでしゃちほこばらなくても、ファンクションすればよいではないか。

岡村：特別号は一般用のPR文書としては長すぎる。

西村：これで研連を通った以上、将来計画を表に出したPR文書を作るか。

寿岳：組織としての意志表示はコンシステントにすべきである。

磯部：今迄のことはどこにも残らないではないか。とにかくこのような形のものが出た以上、コンシステントなものを書くのは困難である。

小暮：特別号をPR文書としてよいか。

磯部：反対する。

西村：これは今回の計画として出してほしい。実質的に将来計画をもっていることを確認したい。

小暮：その内容に将来のことが抜けているため、PR文書として扱うことには反対意見があったことを議事録に明記することで、PR文書として使用することに決定する。

小暮：一部分の使用は認めるのか。

兼古：配布された以上どのように利用されてもクレームはつけにくい。利用するときは引用をはっきりさせたらよい。

小暮：別のPR文書をつくるか。

田中：全体として不熱心なのではないか。資金もないし延期すべきだ。

中桐：12月のときは作ることになっていた。

磯部：そのときは特別号はなかったの、あらためて議論する。

西村：特別号の縮小版のようなものはむしろ天文台が出すべきではないか。

田中：光天連としての意見を主張するものを出すべきである。

西村：体制問題を主体としたものを出すことになる。

小暮：光天連として特徴のあるものを出すとする準備がある。秋ごろきちんとしたものを出す。とりあえずは活動方針に入れておく、WGに委嘱するなり、小委員会をつくるなりする。

田中：前回の運営委員会のPR文書はほぐにして新しく考える。皆がどれくらい必要性を感じているのか。前回も磯部氏のほかは小平氏しかいなかった。

寿岳：急いで作る必要性がどれだけあるのか。一般の科学誌にもそのようなものが出ている
はないか。

磯部：光天連としての主張がなければ出さなくてもよい。
関：PRの内容についての議論がたりないのではないか。

小暮：現在のJNL T計画をPRし、そのバックグラウンドを示すようなものにする。次
期の運営委員会でじっくり議論してほしい。

6. その他

WGについて次のような議論があった： 望遠鏡WGはすでに文書配布だけになっている。
国際WGは今期1回もやっていない。体制WGはこれから1-2年が大切な時期になる。
天文台の中に核を作ってほしいという意見もあるが、そうすると光天連としての活動
が薄くなる。これからはむしろ天文台の外から意見を出すべき時期である。

石田：望遠鏡WGはある意味で任務を十分はたしたと考えられる。体制WGのメンバを考
えなおしてもらいたい。

寿岳：宇電懇のメンバに1人が2人はいってもらったらどうだろう。

小暮：こちらで宇電懇の運営委員にだれかなっているか。相互乗入れがあってもよいだろ
う。次のWGでどういう人が望ましいか議論してほしい。

(文責：田中、尾中、小暮)

天文学研究連絡委員会討議メモ

3月28日に開催された天文学研究連絡委員会で将来計画に関しては次の審議が行なわ
れた。

(1) 天文研連の名前で作成された将来計画文書が天文月報3月号に掲載された旨委員長
より報告があった。

(2) 大型光学・赤外線望遠鏡計画については内田幹事から天文研連によるendorsement
の成文案が紹介され、若干の議論ののち採択された。その文面は別掲のとおりである。

(3) 光天連からは小暮が前回の天文研連(1984年12月20日)以降光天連内の主
な活動経過を報告した。特に(i)「大型光学赤外線望遠鏡計画」を光天連会報特別号とし
て印刷発行しこれをPR文書の一つとしていること、(ii)研究体制問題について光天連体
制WGが検討を開始したこと、について報告の後、研究体制については光学赤外線天文学
にとどまらず、天文学全般に関係する問題なので、天文研連として全体的な視野から議論
を始めてほしい旨を要望した。

(4) つづいて小平はサイトテストを含めた技術的問題について経過報告を行なった。取
り上げた主な項目は次のとおりである。

1. 架台・駆動・制御関係
2. 鏡筒・ミラーセル関係
3. 主鏡(ハニカム、薄メニスカス、CFRP)
4. 広視野補正光学系
5. ドーム
6. 観測器
7. 調査計画

(5) 古在委員長から主に東京天文台における大型光学・赤外線望遠鏡計画推進につい
ての状況報告があった。

1. 概算要求で調査費を出すよう準備を進めているが、まだ出せるかどうか不明である。
2. 大型望遠鏡にともなって全国共同利用体制が必要なことは台内でも理解されている。
3. 緯度観測所、名大空電研の問題も出ており天文台としても慎重に検討している。

(6) 以上の光天連及び古在台長の報告等につづいて主に研究体制について自由討論があ
った。主な意見は次のようなものであった。

○緯度観測所の重要性をサイエンスサイドでもっと議論すべきである。研究分野は地球物
理学と天文学の境界であるが他ではやっていない。

○測地学審議会のワーキンググループの議論でも緯度観の仕事はどこかでやるべきである
という結論はでている。

○天文研連としては緯度観の体制だけでなく、全体を見なければならない。

○体制については関連研究者の間からもっと議論の盛り上がりが必要ではないか。

○緯度観関係では位置天文連絡会があり研究者レベルでの討議を進めているが、行政的レ
ベルでの議論とつながりが薄いのが現状である。

○太陽電波関係者の間でも空電研の状況を見ながら研究者レベルでの議論を進めている。

○各分野での議論が先であって天文研連が旗をふって盛り上げるというのは良くない。

○光天連としても体制の議論を始めているが、全体の問題としては天文研連でやるべきで
ある。

○共同利用研の場合、東京天文台がその気にならないと進まないという事情がある。一方
では全国関連研究者の要望もありぐるぐるまわりになっている。どこかで破らなければなら
ないがどこもやりにくい。

○ひとつひとつ取り上げて解をみつけないといけない。

○各分野が working hypothesis でよいから出すべきだ。

○天文学全体をみれば結論も出せるのではないか。

○天文学として体制の整備の必要性は確かだし、今がいい機会かもしれない。簡単ではな
いが悠長にやってもいられない。

○各分野で難しいのはわかるが、そこから始めて全体として少しずつ進めていかなければ
ならない。

○天文研連としても今後体制の問題をつめていきたい。

(文責：小暮、小平、寿岳)

我国の光学・赤外線天文学の推進について

昭和60年3月28日

日本学術会議天文学研究連絡委員会

日本学術会議天文学研究連絡委員会は、我国の天文学研究の推進のため、全国共同利用の大型施設として、米国ハワイ島マウナケア山頂に、光学・赤外線域の天文観測に用いられる口径7.5m級の大望遠鏡を設置する計画を進めることが必要且つ時宜を得たものであると考える。

天文学における最近の進歩は著しく、宇宙と、その中の銀河、星、惑星系などの誕生やそれらの進化の過程の解明などが急速に進展しつつある。この進展には、我国を含む各国の電波からX線に至る広い波長域における観測が寄与して来たが、その中でも可視光による観測は常に重要な役割を果たして来た。世界各国でも大型光学望遠鏡が競って建設されて来たのはこのためである。さらに、近年、赤外線域の研究もその検出装置の発展により大きく進み始め、最近の観測の結果は赤外線域の研究の重要性が極めて大きい事を示している。

光学望遠鏡に関しては1960年に建設された東京天文台岡山天体物理観測所の188cm反射望遠鏡が我国では最大のものであるが、これはその集光能力においてその後建設された世界の大望遠鏡に大きく引きはなされるに至っている。一方、この二十年の間に我国の光学天文学研究は著しく前進し、188cm反射望遠鏡及びその後建設された木曾観測所の105cmシュミット望遠鏡をその限界まで稼働させているばかりでなく、外国の大望遠鏡の観測プログラムにそのテーマを採用されて来た研究者も多い。このような状況で全国の関連研究者は、赤外線観測機能をも併せ持つ世界第一級の大望遠鏡("大型光学・赤外線望遠鏡")を計画立案し、その実現を強く希望している。我国の工業技術もこれを可能とするものとなっており、国際的に見てもこのプロジェクト実現の意義は極めて大きい。

日本学術会議天文学研究連絡委員会は、このような状況のもとに、全国の関連研究者の要望する上記の大型光学・赤外線望遠鏡計画を推進する事は日本の天文学研究の発展のために極めて重要であると判断し、この計画の推進に関して関係諸方面の御理解が得られる事を切望するものである。

東京天文台内 望遠鏡WG 会合記録(4) 委員会 本

- 第57回 84年11月7日 トップリング交換法, ハニカム鏡変形, 鏡材調査, 稼働中の鏡面検査
 - 第58回 11月14日 技術検討会報告, Zeiss Kuehne氏と懇談
 - 第59回 11月28日 調査費概算要求項目検討, 風洞実験調査, オートガイド
 - 第60回 12月5日 鏡面検査法(シャックハルトマン法), 精密保時, UKIRTリモートオペレーション実験, 調査費項目検討
 - 第61回 12月12日 ESO職務規定, チャカルタヤ宇宙線観測所, 気象観測器調査(気象庁)
 - 第62回 12月19日 調査スケジュール, ドーム(2), サイトテスト計画, 主鏡の熱解析, ハニカム鏡の通風
 - 第63回 85年1月9日 風洞実験の調査, TMT計画書(1)
 - 第64回 1月16日 SIT検出器, TMT計画書(2)
 - 第65回 1月23日 CFRP鏡材, マウナケアのサイトテスト
 - 第66回 1月30日 温度計測(三鷹26"), 主鏡材, ハニカム鏡変形, ハワイ島の地質
 - 第67回 2月6日 リックシステムによるマウナケアのサイトテスト, サイトテスト試案, 測光器, ドーム試案,
 - 第68回 2月13日 ハニカム鏡変形(テキサス7.6m), サイトテスト手順
 - 第69回 2月20日 温度計測(岡山), ドーム建屋部屋割(1), オートガイドシステム
 - 第70回 2月27日 マウナケア地形, ドーム建屋(2), 観測機器(1), 収差関数の展開(ツェルニケ多項式)
 - 第71回 3月6日 ドーム建屋(3), 制御系, リモートオペレーション, 温度計測(岡山・三鷹), 多天体分光器実験
 - 第72回 3月13日 ドーム建屋(4), 観測機器データ処理系, ハニカム鏡変形, 補正光学系
 - 第73回 3月20日 ハワイ報告, 観測機器(2)
 - 第74回 4月3日 赤外観測器, ハニカム鏡の熱解析, 大気分散補正プリズム
 - 第75回 4月10日 アクイジションシステム, 検出器, CFH風洞実験
 - 第76回 4月17日 温度計測(木曾・堂平), 主鏡の熱解析
- 原則として水曜日 15:00 - 17:00
 前回の報告は会報33号p8にある。

** 会員名簿(1985. 2.15)の訂正 **

頁	誤	正
1	田村 真一	内3318
1	土佐 誠	内3324
1	氏家 慧一	内3318
2	中桐 正夫	内3319
4	喜屋武昌一	内312
4	"	内286
7	伊藤 裕	理論物理学研究室 03-985-2389
7	西田 賢三	The Joint Institute for Laboratory Astrophysics, Univ. of Colorado, Boulder, Colorado 80309, USA 大阪府富田林市

** 会員の異動 **

(脱 会)	石塚 久雄	1985年1月	
(入 会)	土屋 裕	浜松ホトニクス(株)技術部第4グループ 〒435 静岡県浜松市1126-1	電話 0534-33-3113
(異 動)	佐々木敏由紀	東京大学東京天文台岡山天体物理観測所 〒719-02 岡山県浅口郡鴨方町	電話 086544-2156
	立松 健一	名古屋大学理学部物理学教室 〒464 名古屋市中千種区不老町	電話 052-781-5111
	中村 誠臣	福岡管区气象台 観測課 〒811-02 福岡市東区	
	中田 典規	千葉経済短期大学 〒260 千葉市轟町4-3-30	電話 0472-55-3451
(海外渡航)	小倉 勝男	Cerro Tololo Observatory	1985. 3.12- 4. 2
	寿岳 潤	Mauna Kea Observatory	1985. 2.17- 3.10
	山崎 篤磨	"	"
	佐藤 修二	University of Hawaii	1985. 3. - 長期
	前原 英夫	ヨーロッパ各地天文台	1985. 3. 1- 4.15
	若松 謙一	Meudon Observatory	1985. 3. 1- 4. 9
	奥田 治之	オーストラリア(気球)	1985. 1. - 3.
	舞原 俊憲	"	"
	高見 英樹	"	"
	北村 正利	Ilhelwan Observatory	1985. 3.27- 4.11
	清水 実	"	"

光学天文連絡会 Group of Optical and Infrared Astronomers (GOPIRA)

会報 No.35 1985年4月25日発行

発行者 東京大学理学部天文学教室内 光学天文連絡会事務局 田中 済

〒113 東京都文京区弥生2-11-16 TEL03-812-2111 内線4262

郵便振替口座 番号 東京4-131044 光学天文連絡会
